第 5 回川崎市史市制 100 周年記念版編集懇談会　会議録（摘録）

1　日　時　　令和 7 年 7 月 17 日（木）午後 7 時～午後 9 時

2　場　所　　川崎市総合自治会館　大会議室 2

3　出席者

（1）委員　　阿久津委員、大城委員、落合委員、嶋田委員、鈴木（ひ）委員、反町委員
竹内委員、中村委員、にしにし家委員、羽賀委員、福森委員、望月委員

（2）事務局　　総務企画局コンプライアンス推進・行政情報管理部：大村部長
総務企画局公文書館：相原館長、堀切担当係長
TOPPAN 株式会社：浅井、大髙、鶴岡
株式会社トップノック：片岡
市史だよりライター：早川
株式会社アーク・コミュニケーションズ：渡部

4　次　第　　（1）開会／趣旨説明
（2）本のデザインの考え方について
（3）市民アンケートについて
（4）総括／次回案内

5　公開・非公開の別　公開

6　傍聴者　　なし

（次第－1）　開会／趣旨説明

相原館長

本日も大変お忙しい中、第 5 回川崎市史市制 100 周年記念版編集懇談会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。委員からいただいたご意見などを踏まえまして、席の位置を入れ替えさせていただいて、会議室もいつもと違うところになった関係で、配席が少し広めに取れました。なんとなく新鮮な景色になっているのかという（感じがしております）。

それはさておきまして、皆さまにご協力いただいております市史の制作につきまし

て、現在、かなり動きが活発になってきております。ここにきて、ワークショップで小学生記者が歴史の謎に挑戦するという企画がありまして、7月1日まで募集をしていました。参加者も揃って、7月19日を皮切りに、21日、23日、26日に取材などを行い、8月1日には市長へ取材結果を報告する予定で進んでいます。

また、書名についても7月20日まで公募を行っているところです。この後、終了間際ぐらいにご報告をさせていただくところがあろうかと思います。それから、書名案やデザイン案なども出てきたりとか、人物の取材についてのお話とか、そういった話題が盛りだくさんになってきており、今後も、委員の皆さまのご意見やアイデアをいただきながら進めてまいりたいと考えておりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

それでは、第5回編集懇談会を始めさせていただきます。以降の進行は事務局の片岡さんからよろしくお願いいたします。失礼いたします。

（次第―２）　本のデザインの考え方について

事務局（片岡）

今回、議題は2つございますので、それらについてお話を進めたいと思っております。

1つ目は、「本のデザインの考え方について」のお話をしていきたいと思います。

ちなみに、すでにお手元にも資料がありますが、皆さまの色々なご意見を多く取り入れさせていただきまして、各ページは少しずつ解像度が高まってまいりましたので、本日お話していきたいと思っております。

この後、浅井のほうから、各ページについて説明をさせていただきますが、それに伴って、ここの表に書いてありますように、ページごとにご意見を賜れればと思っております。

そうしましたら、浅井からご説明をお願いいたします。

事務局（浅井）

事務局の浅井です。よろしくお願いいたします。

本日、お手元には懇談会のご案内の資料と、事前にメールでお送りしたものと同じものですけれども、会議資料としてプリントアウトしたものをお渡ししました。

まず、議題の1つ目が「本のデザインの考え方について」となっております。こちらが構成案ですけれども、前回までの懇談会で、本の目次案が大きく決まってまいりました。

「本のデザインの考え方について」は、これまでもこちらの場でも体裁や雰囲気、

要素や見せ方など、様々な視点からご意見をいただいてきましたし、昨年度秋に実施しましたアンケートでも、市民の方から「どんな話題なら楽しい、面白い本になると思いますか」という質問の中から、「漫画や文字が多くないほうが良い」とか、いろいろな具体的な意見をいただいてきました。

私ども編集の方でこちらを咀嚼して作ってみたものが、今日お手元にお配りしているデザインの資料になります。本日ご用意しているデザイン案は、構成案 9 つのうちの 7 つになります。7 番目と 9 番目の「数字で振り返る川崎の 100 年」と「かわさき市民百景」のデザインについては、また後日のご提案とさせていただきます。1 番目から 6 番目、そして 8 番目のデザインの考え方をお示しさせていただきます。

パワーポイントの資料ですと、どうしても小さくなりがちですので、今、渡部の手元にございますものが、この本が実際に目指すところのサイズ感になっています。閉じた時に A5 サイズ、開くと A4 のプリントが横になったサイズになっていますので、こちらを回覧していきますので、実際の文字の大きさですとか、手に取った感じなどを見ていただきながらご意見をいただけたらと思います。

今日、ご意見をいただきたいのは、この本のデザインの考え方についてのことです。これまで考えてきた対象読者の、幅広い世代の方、特に若者世代や子育て世代に子どもと一緒に読んでほしいものによく合ったデザインになっているかどうか。

また、情報が読み取りやすく、川崎の歴史に興味が湧くようなデザインになっているかどうかといったところを、ご意見や、留意点、「こうしたらもっと良くなるのではないか」といったところのアイデアをいただけたらと思います。

それでは、（会議資料の）6（枚目）から 15（枚目）まで、一気にデザインの勘どころ「こういう気持ちで作りました」というのをご説明いたします。

まず、最初が「めくってわかる　川崎市の 100 年」というパートでして、こちらはやはり本を手に取って最初にめくって、もうひとめくりしてもらわないと魅力が分かりませんので、透明のフィルムのページを使って、パラパラめくる動作をしてもらう要素を取り入れる目的のデザインになっています。内容としてはまだ仮のものが入っていますけれども、地域の変遷ですとか、多摩川の流域とか、海岸線の違いとか、何か重ね合わせることで、わかりやすい面白いものを、編集で今後考えて作っていく予定になっております。

次が「かわさきの定点観測-100years-」というパートになりまして、こちらは 7 区の歴史を場所ごとに写真で振り返るページです。すごく古いものには浮世絵も活用して、昔の景色と少し昔の景色と今の景色を写真の比較で見せようとするテーマのとこ

ろなので、写真を大きく配置するというのがデザインの勘どころとなっています。また、「現在はこんなです」という写真は、できるだけ同じアングルになるように写真を撮りに行く計画でもあります。

次がこの本の骨子になっておりますテーマ史のところで、「どんなテーマ史を書くか」というところは、皆さんのご意見も多々いただいてきたところです。こちらは、テーマごとに2ページまたは4ページで、1つのテーマが終わって次のテーマに移っていくので、そのテーマの区切りの切り替わりが分かりやすいように、全体を枠で囲ったようなデザインにしています。

戻りますが、これは本全体のデザインにも言えることですけれど、やっぱり「最初から順番に読まないと分からない」、「長い文章をじっくり読み込まないと入っていけない」ということでは、本のハードルが高くなってしまうので、今回の川崎の歴史の本においては、どこから読み始めてもとっかかりがあって、その読み始めたところから入って、面白いと思えば前や後ろを読む。小さい文章の塊を、あっち行ったり、こっち行ったりするという読み方を楽しんでもらうデザインとしています。一番下のところに小さくしているのが、「地名が面白いので載せたらどうか」というご意見をこの懇談会でいただいたので、（本に地名のコンテンツを）載せているものでして、地名だけで載せると、文字ばかりになるので、豆知識ということで、様々な地名を下の欄外の枠で示すデザインを取り入れています。

このテーマ史の次にありますのが、前回ご推薦をいただいた方のインタビューを載せる「人からわかる川崎の歴史」のページになっています。こちらは唯一この本の中で長文を読ませたいところになっていまして、この取り上げる方の人生の機微とか、活動の思いを取材で明らかにした文章を載せるので、ここは文章多めになっています。魅力的なお写真も載せて、「人からわかる川崎の歴史」を伝えたいページといったら、「こんなのではないか」という表れになっています。

この真面目コーナーが終わった後に、おやっと思うのが、このユニークな「川崎【激狭】テーマ史」のところなので、ここでずいぶん本の雰囲気が変わります。こちらは市民ワークショップで提案いただいた「マニアックな川崎の歴史」を取り上げるページなので、「市民が考えたテーマ」で、「市民が興味のあるテーマ」で、「こんなユニークなテーマですけれど、掘り進めると立派な歴史になるよ」という可笑しみを感じさせたいところですので、ちょっと手作り感のあるデザインに作っています。

こちらの「激狭テーマ史」が数テーマ続いた後が、街歩きのページになります。こちらは、「地図で感じる　歩きたくなる川崎史」のページの例になって、今回は、二

ヶ領用水のところを例に作ってみました。こちらは各区から１つ「おすすめのお散歩コース」(を取り上げます)。「おすすめ」というのは、何がおすすめかというと、歴史に触れることができるというところのお散歩コースを示すページです。お散歩していただきたいので、地図が載っていて、何分ぐらい歩いて、この間、アイデアをいただいたお花の見頃であったりとか、食べ物であったり、そういったスポットも載る可能性があります。今、載っている地図はすごくダミー的なもので、街歩きには不要な道が細々とあるのですけれども、今後より精査していきまして、道路名とか交差点名とか、ランドマークを書き込んで、より「街歩きの地図ってこういうのだよね」っていうものにしていく計画です。街歩きのページは、全て４ページ構成になっていまして、最初の見開きでは、今この散歩コースに行けば見られるスポットの紹介になっています。もう１回めくると、その散歩コースを歩く時に、「知っていると、より深みが出る」歴史の知識を載せたページになっています。こちらも先ほどの全体観からわかる通り、短いテキストと象徴的なグラフィックのセットで示しています。ただ、全部を同じコマでやっていると、つまらないというところで、見てほしいところに関しては、こういった漫画を載せて、大きく示したりするとか、軽重をつけて、読み手の興味を引くデザインを取り入れています。

最後が年表になります。こちらも第２回の懇談会で本当にたくさんのアイデアをいただいたところを盛れるだけ盛り込んだ年表になっておりまして、まずは最初のところが、「興味のある見出しだけを追えるようにしたら、どうか」とのことで、見出し項目を「まちづくりに関するできごと」とか、「暮らしに関するできごと」というように、アイコンのマークを追っていくと、その関連がわかるようにしています。また、中面で詳しく取り上げている歴史事項については、そのページに飛べるように参照ページを書いています。年表ですけれども、全て文字だけで書かれていると、やっぱり魅力がないと、なかなか年表を読まないよねというところがあったので、ビジュアルもできるだけ豊富に載せようとしていまして。川崎市の出来事については写真で、また、同じ時期にあった国内の出来事については、イメージ画と言いますか、柔らかく表現できるように「イラストを用いては、どうかな。」というところで作ってみました。例えば、1966 年の春、４月には東急田園都市線が開通しましたけれども、その同じぐらいの時にはビートルズが来日して、日本はその話題で盛り上がったというのが比較してわかる。さらに自分史とも比較してほしいので、書き込み欄が設けられていまして、「その時あなたは何をしていましたか」とか、「どんなものが流行っていたか、書き込んでみましょう」というふうに余白を作っておりまして、そこに読者

が自分の出来事を書き込むことで、「マイ年表」が出来上がる仕組みになっているというところが、最初から最後までのデザインの考え方でした。ご清聴ありがとうございます。

事務局（片岡）

浅井さん、ありがとうございます。結構ボリュームが多いというところで、逆にこの細かい部分とかは、こちらの作り手側の思いを、しっかりお伝えしていかないと、なかなか伝わる部分もあるかなというところで、このようにお時間を取らせていただきました。

つきましては、いつも順番にお答えいただいたりするのですけれども、本日は必ず1ページ目からとかではなくて、ランダムに、最初に左側に書いてある「対象読者によく合ったデザインになっているでしょうか」というところでしたり、「情報を読み取りやすく、川崎の歴史に興味がわくでしょうか」というところに当てはめて、私が書いていきますので。ですので、今回このデザインの内容を見ていただいて、先ほど浅井の話を聞いていただいた上で、こういったご感想、ご意見を忌憚なくいただければと思います。

なかなか、「それでは、お願いします」と言っても一人目は難しいもしれないですけれども、いかがでしょうか。「これはちょっと今日用意してきたよ」というところのご意見ありましたら、ぜひ一人目にいただければと思います。どなたか、いかかでしょうか。

事務局（片岡）

今、にしにし家さまに目があったので。いかがでしょうか。

にしにし家委員

結構議題を見て、答えるのが難しいなと思ったのですけど、興味が湧くデザインになっているなというのが（あります。）一番最初の、特にこれ（「めくってわかる　川崎市の100年」）は良いなと思って、「昔の川崎市がこんなに小さかったって知っていましたか」というのは、知らなかったので、これは見たくなるなというふうに率直に思いました。全体的に「こういうところを凝ったよ」という内容とちゃんとリンクしているなというのが率直な全体（に対する）印象です。なので、言うことがあんまりないと思います。難しいなと思います。

事務局（片岡）

なるほど。ちなみに、議題2のアンケートのところに紐づいてしまうので、後ほどまたお伺いできればと思いますが、要は、この市史にとって大事なことは、結局、本

屋さんとか図書館とかいろんなところに置いてあって、ぱっと取って、「これ、なんか買いたいな」、「読みたいな」、「持って帰って子どもに読み聞かせたいな」とかがなければ、広がらない、ただ在庫があることになってしまうので。

例えば今回のデザインの中で、「こういったところは結構手に取って、人に伝えたい」、「自分だったら、これ買いたくなるよ」、逆に言うと、「こういった要素が入ってくるとより買いたくなるのではないか」とか、「それこそ川崎の歴史に興味が湧くのではないか」とか、そういった視点でも教えていただけると大変参考になると思います。

にしにし家委員

自分が手に取った時に見ると思ったのが、最初の 1 番目の「めくってわかる（川崎市の 100 年)」パートと、「人からわかる川崎の歴史」と、あと「地図で感じる　歩きたくなる川崎史」のここら辺がざっと見た時に、気になるところを読むだろうなと思いました。

パターンとしては変化とか差がやっぱり楽しいと思うので、「めくってわかる」のほうも「地図で感じる」のほうも。「地図で感じる」のほうで言うと、現在の「花がどこで咲いているか」とかというのと、「めくると歴史になる」とかという、同じものだけど違う内容が書いてあるのはわりと面白いなというのが、1 番目と 6 番目で思ったところです。4 番目に関しては、より住んでいる人、実際に近所にいるかもしれない人の話というところも、その人が自分の興味があるジャンルじゃなかったとしても、ちょっと気になるなと思いました。

事務局（片岡）

ありがとうございます。まさに最近、全く別の話ですけど、私、元々音大出身だったので「クラシックをなぜ聞かないの」という話をした時に、「いや、全然興味ないですね」と言われて。「でもその人のバックボーンを知れたら、聞くきっかけになります」みたいな話があったのです。だから、その作曲家が何年代で、すごい神格化されているけど、実はとんでもない人間だったみたいなことがわかったりすると、興味が湧くみたいなことがあります。多分ここの「人からわかる川崎の歴史」の部分、今おっしゃった、人に興味がよりファン化して、より深いことを知りたくなるきっかけになるというところは、まさにありがたいお言葉だなと思いました。逆にこうなると「もっといけるのではないか」みたいなものがあれば（教えていただきたいです)。

にしにし家委員

思ったのはサイズのこと。（実際の本は)小さいものじゃないですか、だから面積

としては写真のほうが大きいだろうけど、小さい写真の場合、見る気は減るのかなというところが注意点になります。

事務局（片岡）

なるほど。見え方ですね。確かに。

にしにし家委員

例えば6番目の（「地図で感じる」の）二ヶ領用水のところも、小さい写真がたくさん並んでいるのは、1個1個はちゃんと見なさそうだな。全体的に大きい文字しか読まないかもしれないなと思いました。（読者は）大きいイラスト、大きいデザインで、（全体を読むかもしれないけど）、小さいところは、気になったところとか、自分が知っている内容しか読まないかもという感覚です。

事務局（片岡）

逆に言うと、小さい写真の見せ方とか小さい文字の読ませ方みたいなところに工夫することで、より深いところへの興味の誘因みたいなことはできるのではないかっていうところでしょうか。

にしにし家委員

そうですね。より注意しないといけない、かなと（思います）。

事務局（片岡）

ありがとうございます。頑張らせていただきます。

若干固くなるので、拍手してください。

そうしましたら、こちらは順番制ではないので、にしにし家さまを皮切りに、次、どなたか。

鈴木（ひ）委員

全体的なところで、まず素晴らしいなと思いました。すごく変化があるので、なにか飽きずに、これだったら全部読めるかなと思いました。写真から、あと透明フィルムのところもあって、TOPPANさんの技術が活きる。そういう意味で素晴らしいなと思います。

逆に強いてあげると、ターゲットが結構広いじゃないですか。特に本当に小学生って読んでもらうとなった時に、やっぱり漫画とか、漫画だけのページみたいのがあったほうが手に取ってもらえるのかなと思いました。例えば、二ヶ領用水の歴史みたいなところがあったと思うのですけれど、そこだけの歴史漫画みたいなページがあって、「詳しくはこっちを見る」みたいな感じで引用しているようなものがあると良いのかなと。よくある「進研ゼミ」の雑誌で最初に漫画がありますけど、つい読んでし

まって。そういうようなものがあると良いかなと。

もしかすると、場合によっては別紙でつくるというのも、選択肢としてありかなと思いました。それぐらいです。個別には全然（問題ないと思います）。

事務局（片岡）

ありがとうございます。大体歴史を知り始める（きっかけというと）、学級文庫のような昔教室にあった漫画とかで見ていて。余談ですけど昔の絵と今の絵が全然違って、今のはめちゃくちゃか可愛くなっているらしいですけど。確かにこういったところで、一つの誘因にしていくということですね。まさにおっしゃっていた通り、子どもの捉え方のところを、この紙面でどこまで行くのかというところは、今日始まる前に（編集側の）中でも議論していたのですけれども、やっぱりこれの本を渡されて、この大きさで、この文字量で、小学校１年生が興味を持って読むのかと言われると、「いや、それはやっぱり難しいよね」という中から、どちらかというとメインとなる考え方は、やっぱり大人が読んで、「これ面白いから、一緒に見に行こうよ」だったり、「こういったところ興味があるから、一緒に見てみない？」だったり。大人がインフルエンサーになって広げていければ良いのかなと思います。

こういった子どもでも読めるようなワンコンテンツは確かに面白いです。

鈴木（ひ）委員

やっぱりちょっと字が小さいと思ったので。その字のサイズで小学生に読んでもらえるコンテンツはちょっと難しいな。限界があると思います。

事務局（片岡）

ありがとうございます。ぜひそこは別紙も含め、検討していただきたいです。予算も別かもしれないですけど、ありがとうございます。続いてどなたかございますか。

阿久津委員

私もすごいデザインがカテゴリーごとに変わっていくのが、ほんとに読みやすくて、ワクワクするなというふうに思っていました。

５番目の「激狭テーマ史」のところですけど、ユニークな感じというのが、この「激狭テーマ史」のロゴというか、アイコンがすごい今時っぽいというのは、子どもに刺さりそうな（感じがしていて）、すごいので。ちょっとフロンターレとの関わりがあってかもしれないですが、こっちをもう少し大きくすると目線が向くかと思ったのと。「なんか激狭テーマ史って面白い」みたいな感じで、目を引くかなというように思ったのと。

このページだけ、細かい文字が青いのですが、黒の方がやっぱり読みやすいかな。

下は、白地だったら良いですけど、ピンクが敷いてあるので。ちょっとコントラストが、高齢者には見にくいのではという感じがしました。文字の大きさとかは、それぞれ老眼鏡とかで、どうにか私も持っていますけど、これでどうにか読めるかなと思ったので、色をちょっと。細かい字は特に黒が良いなと思います。

あと、この 6 番目の地図のところ、せっかくなので、できるかどうか分からないですけど、Google マップとかの QR コードとかがあると、（スマホで）地図を見て歩くのも良いですし、さらに、ちゃんと細かい地図があると、近くに行った時とかに、ちゃんと見つけやすいのかな。QR コードは他にも、その地図だけに限らず、要所、要所でこう検索できるっていうか、というのがあると、さらに進んで楽しめるのかなというように思います。

事務局（片岡）

ありがとうございます。確かに、せっかく冊子を作っていくのであれば、QR コードでデジタルとリアルを繋いでいくと、確かに面白いです。しかも最近すごい自分で思うのですけど、車もカーナビだし、歩いていても昔みたいに地図で「今、何交差点だっけ」みたいに見ることがないじゃないですか。ずっと(デジタルのナビで)歩いていけるから、子どもからすると「じゃあ、これ（冊子の地図）で一緒に歩こう」と言われても、「この紙でどうやって歩くのですか？」みたいなことになりかねないのかなと思うので。確かにここら辺は実際歩いてもらうということを考えると、すごく面白い案だなと感じました。どんどんブラッシュアップされています。ありがとうございます。他、いかがでしょうか。

羽賀委員

全体は、すごい完成が楽しみで、読んでみたいなと思いました。

地図のところに、なんか今話していたお話と、すごく通じるなと思ったのが、逆に、アナログの地図の良さというのもあるなと思っていて。もし、ここに書き込みとか、「行った」印をつけるとか、スタンプラリーまではいかないかもしれないですけど、なんか「行った」という印がつけられること、何かしらがあったら、私も、ここ制覇してみたくなるとか、より歩きたくなるのではないかなというのが 1 つありました。

あともう 1 つは、最初の「めくってわかる」のほうで、これも、すごい私の個人的な（意見で）あれなのですけど、めくれることが楽しみだなと思いつつ、やっぱり地図は平面になってしまうので、もったいないなと思っているので。地形が見られるような等高線とか、分からないですけど、3D の浮き出るのとか、そういうので地形が

見えると、それこそ路線図とかは、地形があると面白そうだなと思いました。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。めちゃくちゃ面白い角度から（のご意見ですね）。あと面白いなと思ったのが、今は昭和ブームというか、結構昔のレトロなものに対して愛着が持たれる面白い時代だなと思っていて。このアナログの地図の良さの部分で、「行った」印をつけていくという「不便が良い」のところが、すごく面白いなと思って。

勝手に余談ですけど、誰も知らないかもしれないですが、昔（のテレビ番組で）「水曜どうでしょう」ってご存じですか。「水曜どうでしょう」には、ヨーロッパ全制覇する企画があって、（新しい国に入ると）大泉洋の T シャツに書かれた地図を塗っていくということを思い出して、確かにくだらないけど面白いなと思ったのが 1 点で。あと、昔もありましたよね、小学生向けの雑誌の付録で、青と赤の眼鏡かけると、（ものが）飛び出るみたいなことがあったり。多分今の TOPPAN さんは、もっといろんな技術を持たれていると思うので、裸眼でもいけるみたいなのがあるかもしれないです。ぜひここら辺は、驚きをさらに驚かせるみたいなものを作っていけると面白いのかなと思いました。めちゃくちゃ面白いアイデア、ありがとうございます。

それでは、反町さまお願いします。

反町委員

参加型でなんかできたら良いなと、ちょっと今思っていたので。スタンプラリーとか、そういう塗っていく、印つけていくだけでも良いなと思いました。

全体的にはそのデザインとか、あと色の部分とか、もう私の感覚では素晴らしいなと思っていて、完成形に近いぐらいのクオリティだと思っています。正直、その部分は突っ込めるところはあんまりなくて。

その上で、さっき実際のサイズを見せてもらって、私も感覚的に、なんとなくもう少し大きいイメージがあったのですけど。実際に手に取ると、開いて A4、閉じると 1 ページあたり A5 サイズいうところで、第一印象としてちょっと小さいと思ったのですけど、ただ、私もあのサイズが良いと思っていて。倍の、開いて A3 サイズだとちょっと大きすぎると思うし、なかなかカバンに入れない。あれがそのまま入らないサイズになると、結局、せっかく製本されているようなものを、無理やり折られちゃったりすることもあると思うので、あのサイズ自体は、私は良いと思いました。改めて。

その上で、いろいろな人に見てもらったり、興味を持ってもらったりするところ

で、冊子のサイズがあのサイズになるというのもそうですけど。先ほど写真の話が少し出たと思うのですけど、やっぱり見る気がより起こる写真と言うと、どうしても、引き絵というか、景色を全体的に写すような写真がメインで使われていくとは思うのですが、その中で、やっぱり特に子ども、小学生ぐらいとかの気を引くものというと、やっぱりアップで、とりあえずぱっと見て目に入って、知っているものとかがあると、子どもがすごく喜んだりして、興味を持ってくれる（かもしれないです)。私なんか大人になっても、例えば最初の川崎区のページのところ、「六郷の渡し」ページのところで、例えば、電車（の写真）が載っているのですよね。電車（の写真）が載っているだけで、この全部の写真の中でも、私は電車の（ところ）が気になったりします。それ以外でも、例えば、もちろん人の顔でも良いし、ぱっと視界に入った時に、気になるようなもので、そこから読み進めていくようなかたちが作れると、子どもさんが直接見ても、そこに興味を持ってもらえたりするのかと。写真があると、例えば、動物とか、私の感覚だと、子どもが虫とかも好きなので、虫はあんま大きく載せるのも、ちょっと違うかもしれないですけど、そういう興味をぱっと引くようなものがあると良いのかなと思いました。一旦以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。確かにそうですね。写真で、自分に関連すると思うから、そこを読み進めるのは本当にそうだなと思っていまして。なんの写真を載せるかということは多分それぞれ関連して、割とキーワード的に強いなと思うのと。ピックアップして載せていると思うのですけど、多分ここの（目を）引ける部分というのと、先ほどにしにし家さまにおっしゃっていただいた「小さな写真の見せ方」だったり、そういったところをしっかり組み合わせて、グラフィック的に、絵としてしっかり見られるものになってくると、すごく良いのかなと思いました。ちなみに発売されたら、買いますか。

反町委員

もちろん。楽しみでしょうがないですよ。

事務局（片岡）

ありがとうございます。ぜひそこら辺はまた今後、もしかしたら「どんなものが目を引きますか」とかというところを、またご意見をお伺いさせていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、他の方いかがでしょうか。

福森委員

話しづらいかな。ネタが減っちゃうかもしれないです。本当に最初のフィルムのアイデアは素晴らしいなと思いましたけど、羽賀さまがさっきおっしゃった高度（が見える）アイデアって、言われてみれば、南武線に乗っていると、丘陵がずっとあって、山、森が続いているのが不思議で、「あれってどこからきているのだろうな」みたいな、「どこからどこまでがつながっているだろうな」とか思ったりするので、そういうのがわかると、すごく（良いと思います)。いずれにしても、興味が湧いて、より日常の生活というか、自分の近所のこと、歴史がわかって良いなと思ったのと。

この市史って何年ぐらい使われるのかな。少し思ったのが、何年後まで、この最新版というか、この市史、次の発行のタイミングはいつぐらいだろうなと思ったのは、あんまり最新の、今流行りものばかり乗せてしまうと、どんどん古さを感じるようになるかなっていうのが、気になるところではありましたね。昔の写真とか置き換えると全然良いと思いますけど、今を切り取ると、どんどん古くなって、何年か後には、「ダサい」という感じにならなければよいなと。本当に感覚的なところで、申し訳ないのだけど、思ったりしました。

あと、本のデザインの、年表の中で「自分史」を書き込むのはすごく良いので、それも素晴らしいアイデアだなと思ったのですけど。この対象となる若い親子さんとか、なるべく若い人に手に取ってほしいという人だと、2000 年代以降の歴史だから、あんまり古い情報は自分史に書き込めないだろうなと思っています。親世代よりも上かもしれないぐらいの、ウルトラマン(ブーム)とかそういうのはきっと親世代以上だろうなと思うのと。2000 年代以降のところが、書き込みが多くなるのかなと、個人的に思ったりしました。

あと、高学年以上だと、漢字はある程度、皆さんきちんとお考えになって、体裁とか整えていらっしゃるのでしょうけど、漢字は全部読める漢字にするのかな（というところが気になります)。高学年以上、その学年以上は読める漢字とかあるから。あんまり難しい漢字は、ルビとか必要かなと思いました。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。確かに言われてみると、私は 1987 年生まれですけど、1950 年の話が多分書けないので。今ちょっと思ったのは、「おじいちゃんに聞きに行ってみよう」とか、「お母さんに聞いてみよう」みたいな、なんかそういったワンポイントみたいなものがあったりしても、コミュニケーションツールとして面白いのかなと思いました。ありがとうございます。

あと、振り仮名について編集側（の考え）をお願いします。

事務局（渡部）

読者の方は、小学校高学年も、と思っているところもあるのですけれど。やはり20、30代の子育て世代の方がメインターゲットと考えていますので、漢字に関しても、そういった方々が普通に読めるという部分は意識して「漢字表記はどうするか」、「ひらがなにするのか」というのは考えたいなと思っております。

あとは、地名とか、大きい文字で、先ほど見ていただいた「定点観測」のところだと「六郷の渡し」とか、そういうところに関してはルビを振って、読んでもらえるようにはしたいなと思っております。

事務局（片岡）

ですので、確実に「八丁畷」にはルビが絶対に入ります。

事務局（浅井）

結構、6年生まで習う漢字だと、かなりの漢字が使えます。

事務局（片岡）

ありがとうございます。そうしましたら、続いていかがでしょうか。

中村委員

なにか本当に楽しみになるなと思っていて。さっき実寸大を見させていただいて、正直「皆さん文字小さくないですか」と思って。

本当にこれ（会議室内に置かれている福岡市史『ふくおか歴史探検隊』）と同じサイズなのだなと思って見ていたら、こっち（『ふくおか歴史探検隊』）の方がちょっと大きめなので、何ポイントか決めているのか。ルビが小さいのは良いですけれど。これのサイズに、印刷してから小さくなってしまったのかなと思いつつ、結構小さいな（と思う。）文字があって、本当に年齢が上の人のターゲットじゃなくなってしまうので、疲れてしまうかなっていうのは少し思いました。

あとは、見やすい書体っていうのも少しあるかなと思うのですけれど。先程の印刷物だと少し文字が小さいかなというように思いました。

でも、子どもが興味を引くなと思いつつ、ざっくり見て、100周年の時によく見ていたいろんな色を使っているのは良いですけど、川崎のロゴとか1個も入ってなくて、川崎のカラーはどこのページで。カラフルな川崎だからカラフルで良いのかなと思いつつも、一体どこに（入るのかと）。例えば「このフィルムもなんで緑なのだろう」とかは正直思っていて。各区のこの右側とかも「なんで各区がこの色になっているだろう」とか、よくわからなくて。でも見やすさ（なのでしょうか）。でも、ピン

クの横にオレンジがあると、見にくくない？という。ちょっと色使いが今の川崎と全くリンクしていないのを感じました。ほんと見ていたら、私、川崎区に住んでないので、正直、「川崎区のこのマークって何」と思って、「このマークって何か」を絶対川崎の由来になっているのか、もしそうだったら、「このマークはこれを表現している」のを説明がほしいな（と思います)。

嶋田委員

（マークに書かれているのは)「K」と「波」ですかね。

中村委員

（そういう説明があると)「やっぱり海だからかな」って、ちょっと想像を掻き立てられたのですけど。あと理由と、この「カワサキノコト」では、絶対入っているのですけど、そのところのお花とかもすこしあると良いのかなと思いました。

なにか色使いがカラフルになっているから、若干その川崎市らしさの色がもうよくわからなくなっているのかと。ロゴが全く使われていないのもそうですけど。

とは言っても、さっき福森さんがおっしゃった通り、この市史を何年使うのかって、今のロゴのままにいくかどうかも分からないので。そういうのもあるのかなと思いつつ。

実は私は、フィルムページのところ、なんで緑なのだろう？というのが正直あります。緑って見やすいのかな、研究されているのかなと少し思っていました。

あとは、初回から言っているのですけど、この小ささだったら、「下敷きは無理かな」と思っていまして。でも、見開きになったらちょうど A4（になる）じゃん。なんか街歩きの時に、子どもがこれを持っていると、だいぶ重いなと思っていて。子どもはなんか下敷きを持って、お母さんたちがこの本を持って、「ここだね」と言ったら、ちょっとそういうのも下敷き、子どもは（この本の)「(街を）歩く」の部分のフィルムとか、下敷きになっていて、お母さんがこの本も持っていると良いのかなと思ったのと。

あと、私は気になるところを耳で折るか、付箋をするので、もしかしたら、予算またいっちゃっているので、流してもらってきたのですけれど、オプションで、付箋じゃないですけど「行ってみたい」とか、「ここ好き」とかじゃないですけど、そういうのがもしできたら嬉しいかな。子どもがただ喜ぶだけですけど。「ここ行ってみたい」とか、メモとか、さっき（本に）メモを書き込むと言っていたので、紙は上質紙になるのかなと想像はしているのですけど、付箋を貼って、書けるみたいな、または「ここ行ってみたい」のタグがつけられるような（かたち）になると、嬉しいと思っ

たのですが、予算もあると思うので、差し込みでなにかあると、これを持って、子どもと一緒にメモがしやすくなると良いなと思っています。

でも、ほんとに（本を）見ていたら、私はもう全く分からないことばかりかも、ここだけでもまとまっていた。

ちなみに最後にもう１つ質問が、この本はトータルで何ページになるでしょうか。

事務局（浅井）

200 ページです。

中村委員

これ（福岡市史『シーサイドももち』）より厚くなるのですね。

事務局（浅井）

（本の厚さは）紙の厚さにすごくよるのです。この見本は結構厚めの紙を使っています。

中村委員

そうですよね。（紙が）ふわふわですものね。本当に読み物としては素敵だな（と思います）。少し（発言が）バラバラしたのですけれど、以上です。

事務局（片岡）

いえいえ、ありがとうございます。確かにロゴ周りってあんま載ってないですよね。今言われて、ふと気づきました。この意図は（なんでしょうか）。

事務局（浅井）

逆に表紙ですとか、最初の市長さんのご挨拶のページですとか、は（ロゴを）持ってくると思うのですけれど。

事務局（片岡）

使いどころがなかったです。

事務局（浅井）

そうですね。使いどころがなかったです。

中村委員

そうか、これが後ろなのか。

事務局（浅井）

その後ろですとかは、絶対持ってくると思います。奥付という、本の最後のここが作りましたという記載のところに。

中村委員

昨年１年間、すごく嫌になるぐらいに（100 周年のロゴを）見ていたので。嫌じゃ

なくて、刷り込まれているので、（この本に使われてなくて）不思議だなと思って。だから、このカラーリングは、「なぜここがこうなっているのかな」とか、それこそ「麻生区には緑が多かったから、緑かな」とかって本当は思っているのですけど、「なぜオレンジだな」とか、不思議な感じもしたのですけど。それこそロゴのところの下に、本当にうっすらと、この何ページの下の方とかに、ずっとロゴがあるとか、なにか少しポイントであっても良いのかなって思ったのですが。でも、3 年後変わっているかもしれないですね。

事務局（浅井）

パートごとのカラーは決めているのですけど。今もたまたまこちらは多摩区になっていますけど、多摩区だから、オレンジなんじゃなくて、「わた史（人からわかる川崎の歴史）」のページがオレンジなので、この次に幸区がきても、（色は同じで）オレンジです。逆にこちらの「定点観測」のほうは（どの区でも同じ水色です）。

中村委員

（同じテーマである限り）ずっとこの色です。その（各区の）ロゴだけがちょっと変わっていくのですか。

事務局（浅井）

そうですね。

中村委員

きっと考えられているのだろうなと思いながらも、ここだけ見ていたので。どうしようかなって思って少し聞きました。

事務局（片岡）

でも見る人によっては、「なぜこの色なのだろう」という（疑問に思うかもしれません）。川崎（のロゴ）は 3 本で、赤と緑と青の 3 色なので、「これはなんでこの色なのだろう」というところまであったりすると、すごく面白いじゃないかなと思います。確かにそれは意外と憶測にもなったりするので、良いなと思いました。

あと、すごく面白いなと思って、もちろん予算的なところも（あるのですけど）、関連グッズというか、ディアゴスティーニみたいに、初回限定版には何かついてくるみたいなものとかあったりすると、買う理由にもなるし、遊ぶ理由にもなるし。こういったところに遊びがあったりすると、すごく面白いなというのをすごく感じたので。今後、もしかしたら、次のアンケートの議題のところでもあるのですけれども、実際にアンケートを取る時に、ガラッと回して、抽選で当たったみたいなところも。ただ洗剤渡すとかそういうことではなくて、そういったものがあったりするのも面白

いのではないかな。この部分に紐付けられればと思いますので、ここら辺はぜひ色々と考えていきたいというように思った次第です。

あと、フィルムはなぜ緑なのかというところは、何か理由があるのですか。

事務局（浅井）

この１番目の（パートの）ページが濃い緑（となっている理由はありますか)。

事務局（渡部）

その特集ごとにキーとなるカラーを決めましょうというふうに考えていまして。今、ちょっと見てもらうとわかるのですけど、少しグラデーションのように、最初の緑から徐々に色が変わってきて、最後こうなっていくというかたちで、テーマごとに色を設けて、その切り替わりというか、「この特集ではこのカラーですよ」というのをわかりやすくしています。そうすると、頭のほうは、強い部分のほうが目に止まりやすいというところがあるので、巻頭最初のほうには、その強い緑というものを選択しました。

事務局（片岡）

なるほど。どっちらかというと、川崎のストーリーみたいなところというよりは、やっぱり視覚的な、読み進めるというところの中での色のグラデーションを作っていった。

事務局（渡部）

そうですね。九つの柱があるので、比較的テーマが多いので、そこにいろんな色が入ってしまうと、ごちゃごちゃするので。しかも徐々に色が変わっていくという感じのほうが、見た目にも、目にも優しいというか、（そういう効果が）あったりするので、そういう意識はしています。

事務局（片岡）

ありがとうございます。私も色々、もうちょっと聞きたいこともあったのですけど、１回先に進みたいと思います。他、いかがでしょうか。

望月委員

今までも出ましたけれども、書体とカラーについては、特に書体はやっぱり文字が小さいのと、ユニバーサルを考えながらその書体は使用した方が、今の時代は良いのかなという気がしました。

それと、特に赤字の上に青字っていうのはやはり読みづらいところがあるので、そこはユニバーサルカラーをしっかり抑えた方がよろしいかなと思います。

コンテンツごとに色を変えていくということは、わかりやすいかなと思うのですけ

れども、その中で１つ、３番目の「川崎のテーマ史」、ここだけはテーマごとに「色枠」で囲む、その色を変更するということになっているので、ここは結構、３番目のパートは色がテーマごとに、ばらつきが出るかたちになってしまうのですかね。

事務局（渡部）

一応２パターン用意していて、ここのページは結構長い、他の特集に比べると長くなるので、１色だけだと単調になってしまうので。あと、そうすると、どこで特集が切り替わったか、一応、枠では囲ってはいますけど、「ここで、特集が切り替わっています」、「テーマが変わっていますよ」という切り替わりがわかるように、一応２色で用意しています。

望月委員

わかりました。それに関連してなのですけれども、コンテンツのインデックスが、各見開きの右ページの上に、そのコンテンツ名などが入っているのですが、これが見づらいかなと（感じています）。自分が見たいコンテンツのところが開きにくいかなという気がするので。今、見本で置いてある本も、開きの部分に色がついています。本書でも、例えば帯で色づけするとか、そこら辺で、自分が読みたいコンテンツのところで開きやすさという部分で工夫があったほうが、実際に本を読む時には利用しやすいのかなという気がしました。

それと、地名のところは、昔の「はみだしぴあ」のようで面白いなと思ったので、これもせっかくだったら、もう少し目立つような枠組みというか、そういうデザインであるともっと興味を引くのではないかな（と思います）。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。結構色とか文字の話が出てきているのですけれども、ちなみに先ほど中村さまの文字の話があったじゃないですか。ページの中で、「ここのページはちょっと文字が小さいな」と感じられたところ、逆にありましたら、率直なご意見をいただけますか。どのページのどのあたりが、小さいと感じられていますか。

嶋田委員

良いですか。この地名のところ、右の下のところのサイズになると、ちょっと厳しいかなと。ここだけじゃなくて、写真の下のところなどもそのサイズの文字があって、老眼が入っている人間にはちょっと厳しいです。この間も友達と「何歳から老眼になった」という話があって、大体 45 歳ぐらいなので。45 歳オーバーの人は、結構厳しくなってくるかなと思いました。

事務局（片岡）

ありがとうございます。ここの部分が多分小さいと、今のご意見でございます。

多分一番小さいというところで、これは多分（見える）下限より下だと思うのですけど「下限ギリギリはここまで」（は、どのページあたりと思っていますか）。これは感覚値なので。

事務局（浅井）

確かに地名コラムのところは、文字の大きさで 8（ポイント）ですね。

嶋田委員

10 を下回ると厳しくなってきますよね。

事務局（浅井）

目標 10 です。

嶋田委員

続いてなんですけど、多分色々（なコンテンツが）入れてくださっていて、いろんな方のいろんな意見を頑張って入れてくださっているので、逆に言うと、もしかしたら引き算が必要になっているのかなと思いました。（コンテンツの量は）詰め込むとその文字の大きさが小さくなってしまうことにどうしても繋がっています。ここは編集者権限で伐採と、却下却下で。もしかしたら、少なくしてもらったほうが良いのかな、それが全体の印象で思いました。

細かいことになると、今ここで、二ヶ領用水が入っているのですけども、次のページのどちらも二ヶ領になってない。稲毛領で終わっているというのがちょっとありまして。川崎区サイドが、河口のほうが、たぶん海まで行っているのですよね。だから、どこが出口だったのかなというのが、取水口が書いてあるのですけども、今は多分ないのかもしれないのですけど、どこまであったのか（を知りたいですね）。

落合委員

そうですね。資料を見る限り、そこで終わっちゃっている感じがありますね。

嶋田委員

そうですよね。だから、「実際はここまででしたよ」、「今はもう暗渠になっているかもしれないですけども、点々でこうだろうな」そういうのが（書いて）あると、それは僕のちょっと好奇心ですけども。

あとすごく細かいことですけど、坂本九さんとか入っているじゃないですか。川崎市出身の方があって、川崎市出身なのはわかるので、川崎市出身と書かないで、何々区出身って書いてくれたら、良かったなと少し思いました。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。確かに二ヶ領用水、これは資料上も現存していないですか。

事務局（渡部）

多分暗渠になってしまうので、そうすると追えないっていうところです。

望月委員

基本的には追えないです。確認できるのはこの鹿島田駅のところまでです。

事務局（片岡）

そうなのですね。

落合委員

川崎の水騒動の時は、川崎区の村々に水が送られないので騒動になったと。もう下流まで送られていたという（話です）。

嶋田委員

歴史的にはこちらの方がむしろ大切かもしれないですね。幸区より東が今は暗渠になってしまったと。

事務局（片岡）

僕も今好奇心がめちゃくちゃ湧いたのですよ。見えないもの見えるのが、歴史書というか、ロマンなのかなというのは、少し思っています。

望月委員

これは追おうと思えば追えるのですけれども。この後、この先が 2 つに分かれて、川崎堀と町田堀っていう 2 つの堀に分かれ、町田堀は今の鶴見の方に流れていきます。川崎堀も、この先はまた小堀がどんどん多くなってくるものですから、主体となる堀は追おうと思えば、なんとか追えるかなと思うけれども、川崎駅を過ぎるとちょっとなかなか（難しいですね）。

事務局（片岡）

「探偵！ナイトスクープ」みたいですね。ここはできる限り頑張って追っていただきたいので、解明していただきたいなと逆に思います。

嶋田委員

そうなると、折っているページがこう開くぐらいなので、A5 のもう 1 枚（を横に追加する感じですね）

あと、2 点だけです。デジタルの話も少し出ていたじゃないですか。ですので、もしかしたら、今スマホのカメラで見ると、映すと何か別なものが見えるとか、そうい

う仕掛けがあったりしても良いのかな。さっきの歩く地図とかの件も、川崎市でかわTEK（かわさきTEKTEK）というアプリがあるので、それと連携していて、そっちにコースがあったりすると良いかなと思いました。本当に以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。ここら辺のデジタルツールの活用はぜひ積極的にやっていきたいと思うところもある反面、難しいのはそのサービスが、それこそ先ほどいただいた、何年後までにこの歴史書を使っていくのか。「かわさきTEKTEK」も100年後にあるかどうか、スマホという概念があるかどうかも分からないので、ちょっとそこら辺も考えていきつつ、一番良い最適解を見つけていきたいと思います。ありがとうございます。

落合委員

デザインはすごく綺麗で、とてもわかりやすいなというふうに思いました。

それで、皆さんがおっしゃられていた通りなので、特に1章や2章で色分けしていたほうが良いのかなというふうには思いましたけれども、私あまりそういうセンスがないので、特に申し上げることは実はない感じです。

それで、印象的に、やはり川崎の市の歴史というと、すごく古いところからという印象なのですけど、やはり最近というか、まさに戦後ぐらいのことを取り上げていくというのが今回の本なのかなというふうに思っています。

それで、川崎のその中で、こう見て「なんで音楽が川崎で広がったのか」とか、そういうのはちょっと入れてくれると良いなというふうに思ったりしました。そういうのが1つ。

もう1つのコンセプトで、結構いろいろなところで地図があって、歩けるというのが各ページにあるような感じなので、一番最後のインデックスのところにまとめた、川崎の地図の中でまとめて、ここに行くと二ヶ領用水だとこれがあるし、スポーツ施設もここにあるしみたいな、そういうインデックスがあったら良いのかなと少し思いました。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。ちなみに、「いつだって、川崎は」のところの「なぜ」をもう少し深くするというところかなと思うのですけれども。ただ、そこの中で深くというのは、歴史的なところの深さというようなことなのか、それとも、人的な、要は心情的な深さなのか、別にこれはどちらでもなく、より深く調べられるものはここに乗っけていければ良いかなというイメージ（でしょうか）。

落合委員

例えば、川崎は藍染めをやっているのですよね。江戸時代とか、多摩川もすごく、鮎とかそういうものもあって、江戸城に献上していたとか、そういう綺麗な川だったというのがやっぱり背景にあって、染め物にいったとかで、実際そうかどうか分からないのですけれども、そういう話とかですね。

例えばさっきの二ヶ領用水みたいな、川崎が元々こう小さかったというと、市としてはそうかもしれないのですけど。実は二ヶ領用水のように稲毛領と川崎領という2つがあって、もともとは川崎領、それが二ヶ領用水で、江戸時代から結び付きが深かったので、こういう細長い横浜と東京に挟まれた今の川崎市が出来上がったとか。「そういう事前の歴史的な背景が積み重なって、こう今がある」というのが歴史的な考え方なので、そういうところを何かこう言っていただけると嬉しいなというふうには思います。

スポーツ文化、フロンターレのもそうですけども、スポーツ文化というのが昔から大洋ホエールズがあったとか、そういうものが背景にあってとか（の記述）があると良いですけれど。紙面的な問題もあるので、分からないですけれど。

事務局（片岡）

ありがとうございます。それすごく面白いなと思っていて。多分この「いつだって、川崎は」というのと、「人からわかる川崎」のところとか、多分「激狭テーマ史」もそうなのですけど、全部それまでの人だったりとか、歴史とか、場所だったりとか、そういったものが色々と組み合わさって、出来上がってきたものなのかなと考えた時に、そこの深掘りをリンクして、全体が出てくると面白いなと思うので。ぜひそこは、なかなか難しいところはあると思うのですけど、考える側としてはぜひ考えていきたい。

今まさに聞いていて思ったのは、「初詣」というワードは確か京急が作ったのですね。今日、鈴木（勇）さんがお休みになられているのですが。鈴木（勇）さんのお名前を調べてみたら、NHK で答えられた記事があって、その時に京急のことだったり、京急の商売のために、人を集めるために「初詣」というワードができて、全国的に広がったみたいな。「川崎ってなんかすごいな」と思ったりします。そういった横広がりの話とか、深堀していけると面白いかなと思うので、ぜひ編集側は調べて大変ですけど、お願いします。それでは、竹内さまお願いします。

竹内委員

大体私の言いたいことは、同じことの繰り返しになってしまうのですけれど。

まずデザインが非常に良くてできていると思いました。色と全体の構成・変化が良いかなと（思います)。それは素晴らしい皆さんがおっしゃる通りです。

あと、やっぱり字が小さいというのは、さっき私も色々見て、最初に感じたので、そこは何とか解決しないといけないなと思います。さっき始まる前に、福岡の本（福岡市史『わたしたちの福岡市』）を見させてもらって、直感として、福岡のほうが字はすごく多いのですよ。だから、それと非常に対称的で、恐らくこの(川崎の市史)を作る時にはこの本がいつも置いてあるので、これが 1 つに参照点になっていると思いますから、対比がなされているっていう。逆に情報量がすごく少なくなっていると思います。これはやはり皆さんがおっしゃっていたように、そのビジュアルというか、写真とか絵とか漫画とか地図とか、それでの勝負になりますので、ここはやはり工夫のしどころかなと思いますが、今日拝見した限りではその点もよくできています。

先ほどおっしゃっていたように、子どもも 6 年生だと千字ぐらいは習うので、新聞も千字ぐらい読めると、7 割から 8 割ぐらい読めるらしいですから、完全ではないですけど、6 年生という前提をおけばわかるのではないかな。「何が書いてあるか」くらいはわかるのでは。その点はあんまり気にしなくて良いのでは。

私が言いたかったのは、今 2 人がまさしくおっしゃってくださったのですけども、やはりこれは歴史の本なので、この川崎のアイデンティティであるとか、その骨格みたいなものがきちんと表現されていることが、一番大事かなと思っていまして。そういう点では、「音楽の川崎」ってなぜそうなったの、とこれは割と新しい歴史でもあるので、そういったことはきちんと書き込むと良いかなと。他のコンテンツも同じなのですが。それで、私も一番言いたかったのは、実は二ヶ領用水で、先ほど落合さんがおっしゃったと思いますので、こういったことは、1 行か 2 行でも良いです。この 6 番目の「歩きたくなる川崎史」のところに書いていただけると非常に理解が深まるし、歴史の本としての価値が高まるかなと。（用水が）川崎区まで来ていたというのを実は私何かで見ていて、二ヶ領用水は当然そこから分流して、水路がわーっと張り巡らされているわけですよね。その地図を見たことがあって、大正期かなんかの資料に載っていたのですよ。おそらく川崎市の資料じゃないかなと思って。ここには専門家がおられるので確認してもらって、それを例えば 6 番目の片隅に貼っていただくと、すごくその川崎のアイデンティティが二ヶ領用水であることが良くわかるのですよ。多摩区から川崎区まで水路が網目のように張り巡らされている。そういったことはぜひ考えていただきたい。

二ヶ領用水に限らず、先ほど申し上げたアイデンティティとか歴史の骨格という観

点から、それぞれの一言か、絵とか地図とかで表現できますので、ぜひ工夫していただきたいと思いました。

事務局（片岡）

ありがとうございます。ちなみにこの参照資料ってどなたかわかるのですか。

望月委員

多分、明治期の「二ヶ領用水絵図」だと思います。市民ミュージアムが持っているはずですけれども、被災したので、ただ、写真データはあるはずです。一枚ものですよね。

竹内委員

一枚ものです。それで、その江戸期と大正と昭和 20 年代ぐらいの 3 つ並んでいたもの。非常によくわかる。特に大正期の状態がすごくよくわかるでしょう。

望月委員

あとは宿河原にある二ヶ領せせらぎ館、あそこが「二ヶ領用水知絵図」というのを発行しているので、それが多分時代ごとの比較で載っていたのではないかなと思います。

事務局（渡部）

今（見本に）入っている地図とかもそこから（の資料）です。

竹内委員

たぶんネットで「二ヶ領用水」、「水路」で検索すると見つかると思います。

落合委員

川崎市公文書館に行けば、なんでも材料はそろっていますよ。

事務局（片岡）

探せばありますよね。ありがとうございます。まさに色々なご意見をいただいている中で、また持ち帰っていただいて、こういった資料とか、まさに知らないということが、我々にとっても一番終わった後に悲しいことであるので、なにかこういった話をした後に、「そういえば、あの資料をもうちょっと見て、こうやってみたら良いじゃないか」とか、「なんか出典元とか参照資料って、こういう良いものあるよ」とか、ぜひいただきたいなと思います。

我々もそこは勉強させていただきたいと思っておりますので、本当にどしどし、またご指摘をいただければと思います。

一応、次の議題に行こうかなと思いつつ。

鈴木（ひ）委員

すみません、ちょっと皆さんの話を聞いて、3つほど言って良いですか。

事務局（片岡）

もちろんです。

鈴木（ひ）委員

1つ目、色ですけど、川崎市折り紙20色（編集注　市民グループ「からふる！」が作成した「かわさき折り紙」のこと、川崎市の自然・歴史・産業などの地域資源に由来する20色の「川崎市の色」が選ばれ、折り紙として再現されている。）というものがありますよね。あれの検討とかはなかったの、というのを聞きたくて。今、手元でも見ているのですけど、例えば南武線の黄色とか、多摩川の若鮎色とか、川崎市の資源に合わせた20色の折り紙というのは存在するので、それをベースにしたら、「川崎らしさ」などにリンクできるのか（と思いつつ)、そこの版権が分からないですけど、まず（意見として）出しておきます。

それから2つ目が、やはりコンテンツが膨大だなと。どんどん字の大きさの問題になってしまうので、さっき阿久津さんがおっしゃった気がするのですけど、QRコードで飛ばして、「より詳しくはこちら」とか、収まりきらない写真はちょっとウェブ上で見たい人は見てもらうとか、そういう工夫もあっても良いのかなと思いました。

最後の3つ目は、福森さまがおっしゃったのですけど、最後の「自分史」の家族史を書こうというページがあるのですけど、これ書かないかなと思って。

やっぱりどう考えても昔まで遡って書けないじゃないですか。1つ思ったのは、家族は「ここから生まれて、ここまで生きていた」みたいな矢印ぐらいは引けるじゃないかなというふうに思っていて、なにかに使うなら、割り切って、そういう使い方にしちゃうとどうかと（思います)。例えば、小学生がおじいちゃん、おばあちゃんと会話して、この時代に生まれたのだとか、それをきっかけに当時の話をしたりとか、そういう可能性というか、そういう使い方のほうが活きてきてくれるかなと思いました。以上です。

事務局（片岡）

確かに思い出せないですもんね。何年にビートルズとかそういうのはわかるのですけど。

鈴木（ひ）委員

戦前のこととかね、もはや分からないです。

事務局（片岡）

ハワイにいつ行っただろうみたいな、去年のことも覚えてないのに。確かにこれ結構攻めているけど、面白いといえば面白いですよね。おじいちゃんがいつからいつまで生きていたのかとかの線引きと「・・・」のかたちで更新されていく。なんか継ぎ足し、継ぎ足しの本みたいに、そういうのが面白いですけど、できるのですかね。

事務局（浅井）

できると思います。

鈴木（ひ）委員

そういう風に、そこに、それを書く欄にしちゃうというか。

事務局（浅井）

塗るとか。

鈴木（ひ）委員

そうです。

事務局（片岡）

でも面白いです。ありがとうございます。うちではたまたま、じいさんが家系図を作っていて、ああいうのを見るのも面白いじゃないですか。これはなんかすごく面白いです。まさにちょっと今みたいに、色々皆さんの意見いただいた上で、少しここを補足しておきたいとか、（そういうご意見があれば）いただきたいなと思ったので、その時間を取ろうかなと思ったのですけど、何かございますでしょうか。

望月委員

1つよいですか。先ほどから出ている、もっとより詳しく知りたい時にQRコードっていうのもあるのですけれども、これはもうこれで、かなり盛りだくさんですので、これ以上盛っていくのは大変ですけれども、公文書館の皆さんはご存知かと思いますが、教育委員会の文化財課が「川崎市文化財保存活用地域計画」という計画資料を作っています。これは文化財保護法の改正に基づいて文化庁が認めた地域計画なのですけれど。そこに先ほど来（らい）出てきている「地形」だとか「土地利用」のことだとか、非常に細かく前段で書かれているので、だからそういうことを、もしもっと知りたいなと思った時には、その地域計画に少し飛ぶようなかたちで。あの計画の内容をこの本に盛り込むのはまず不可能だと思いますので、そこに飛べるようなリンクがあると、この本をきっかけにもっと調べてみようかなと思った人たちにとっては、非常に良いのかなという気がしました。付け加えでありますけれど。

事務局（片岡）

ありがとうございます。この文化財保存活用地域計画というのは、（どんなものなのでしょうか）。

事務局（堀切）

昨年度、教育委員会の文化財課が作成したものです。公開されているウェブページにリンクで飛ばすということは可能です。

望月委員

かなり細かくできていますので。

事務局（片岡）

それは面白いですね。それとも、継ぎ足し、継ぎ足しで更新されていくのですか。

望月委員

いや、一応現状はそれで、しばらくいくとは思いますけれども、そのあと、また何かあれば改定版というかたちにはしていくのだと思います。

事務局（片岡）

確かに。知りきれないものは「続きはウェブで」というものじゃないですけど、そういうのが見られたほうが絶対良いかなと思うので。

あと、このQRコードというところの世代的な考え方も、このデジタルで見にくい人に対して「どう見せていくか」みたいなところも考えていかなきゃいけない部分もあるとは思うので、ぜひそういったところも踏まえて、討議させていただきたいと思います。ありがとうございます。他、いかがでしょうか。

阿久津委員

私だけわかっていないか、あれなのですけど。この8番目の「年表」は（今示している）この年代だけじゃないですよね。

事務局（浅井）

じゃないです。平安から、なんならこの間の取材で奈良ぐらいから歴史があるので、前半のところは毎年これぐらいの幅はないので、何百年かぐらいから、ざっといきますけれども。年表はそのあたりから現在までです。

阿久津委員

メモは多少あっても良いのかなと思ったけど、そこらへん（奈良時代等にメモ欄）はいらないですよね。

事務局（浅井）

はい。そうですね。

阿久津委員

そこから切り替わっても良いのかなと思いました。

事務局（片岡）

個人的な興味として、自分の家族がどこまで巻き戻れるのかというは、気になりますね。奈良までいけたらすごいじゃないですか。そういった遊びもあったら、面白いなと思います。そこら辺は全くもって消してしまうのか、こういった生きていた年代のところの遊びとして加えて、クロスして考えていくのか、そこも含めて色々と考えていきたいかなと思います。

事務局（浅井）

遊びといった点では、刊行年よりちょっと先まで年表を書いていこうという案もあります。

事務局（片岡）

刊行年というのは。

事務局（浅井）

2027 年 3 月が刊行年ですけど、年表は 2028 年、2030 年ぐらいまで、未来を載せる。

事務局（片岡）

良いですね。大谷翔平の目標のやつですね。ありがとうございます。他に何かございますか。大丈夫でしょうか。

あとは、先ほど申し上げたとおり、まさにこういった情報とかは、どしどしといただければと思いますので、ぜひまた持ち帰っていただいて、気になった点がございましたらご意見を賜れればと思います。

（次第―３）　市民アンケートについて

事務局（片岡）

そうしましたら、次の議題に参りたいと思います。

去年もアンケートを取りまして、本のコンテンツとしてどのようなものが良いかとか、そういったことを聞いてまいりました。それらを踏まえて、皆さまからもご意見をいただいて、今ここまでなんとかやってこられたかなと理解しております。

事務局（浅井）

この川崎の歴史の本を作るプロジェクトでは、プロジェクトの一環として市民アンケートを実施しています。なぜやるのかというと、参加する市民の数を増やしたい、私もこの歴史の本に関わったと感じてもらえる方の絶対数を増やしていきたいってい

う目的があります。その全体数を増やすことで、この出来上がった本に対して、単に誰かが出した本ではなくて、私の何かが載っている、反映されているものになることで、愛着を持ってもらおうというのが目的です。

アンケートとしての目的はやっぱり参加者ですね。選ばれた方とか、何か行動したから声が入るのではなくて、たまたまそこにいたからとか、情報を目にした誰もが参加できるので、幅広い層からの意見を多量に集められる。その意見の多さを数値で示すことができるので、これが多そうです、少なそうですっていうことの判断材料にしやすいと。

まず、実際にアンケートをやると、「こんな本を作っているのですか！」といった会話が少なくとも生まれますので、出来上がるまでの過程を水面下でひそひそと作っているのではなくて、「こういう本を今作っているのです。皆さんの声を聞きたいのです。」という会話が生まれるようにしていきたいということで、アンケートも大事なプロジェクトの一貫としてやっています。

それで、3 カ年の発行までには、アンケートを年度ごとに 3 回予定していまして、秋の祭りシーズンにブースを出店してリアルで市民との接点を持つことで、並行してウェブアンケートも実施しまして、お祭りに来ない方でも、たまたま SNS とか、公文書館のホームページや市のイベントページからアンケートの存在を知れば、自分の意見を投げられるというリアルとウェブの並行で実施しています。

令和 6 年度、去年度は「川崎市の歴史として思い浮かべるもの」、「どんな話題なら楽しい・面白いか」といったことを聞きました。

市民への広報紙の「ししる」にも載せているように、去年度のアンケートでは、ご意見の数としては 3,000 件を集めることができました。やったことは、お祭りの会場でパネルを出して、「川崎らしいと思うものはどれですか」というものを 5 つの中から選んで、シールで貼ってくださいって、もう 1 つは、「どんなテーマが載っていたら良いですか」というのをシールで貼ってもらって、さらに興味をお持ちでしたら、ウェブの方で詳しいアンケートをしているので、こちらには、居住区とか年代から、「川崎市の歴史と聞いた時に一番最初に何を思い浮かべるか」、「どんな話題なら楽しい、面白いと思うか」というところを、年代、居住地域という、どれくらい住んでらっしゃるかっていう情報と一緒に集めることで、長く住んでいる人はこういうところに興味があるとか、今、ターゲットにしている 30 代、40 代の方は「こういうテーマを読みたいと思っている」ということが実際にわかってきて、構成案に取り入れることができました。

令和７年度もお祭りに出る予定をしておりまして、あさお区民まつり、多摩区民祭というように、今年は区民祭を攻めようとしています、高津区はもう終わっちゃったみたいなこともありますので、別でもう１回高津区には行こうかなとしていたりしますが。

やることは、このガラガラ抽選機をブースの前に置いて、客寄せして、パネルシールで今年は書名案、本の書名として「どんなタイトルが本についていたら魅力的ですか。読みなくなると思いますか」っていうところの投票をしようとしています。

それに加えてウェブアンケートも実施できるので、市民から何千件という数で意見を得られるところを逃す理由はないというところで、聞きたいのですけど。

「何を聞くと、この事業に取り入れられそうか」、「このガラポンの横に置いてある景品って、何があったら少しやってみようかなと思うか」とか、そういったアンケートに関するアイデアをいただけたらなと思っています。

去年聞いた「何を載せたら、本が読みたくなりますか」は、もう構成案決まってしまったので今年は聞けないです。ですので、構成案ではなくて、先ほどもうすでにいくつか答えをいただいたなと思っているのが、ノベルティですね。「本にどんな付録がついていたら、買いたくなりますか」とかというのは、ウェブアンケートで聞ける１つの案だなと思っております。そういった観点でお願いします。

事務局（片岡）

ありがとうございます。そうしましたら、お伺いしていきたいなと思います。

「どんなことを聞くと良いでしょうか」というところ、すごく難しいなと思っていて、「何のために聞くか」というところをちょっと１回整理させていただきたいなと思うのですけど。

去年は、この本の内容とか、「どんなものをこの中に入れることによって、しっかり伝わるか」というところのコンテンツを整理するためにアンケートを取ったので、逆に今年このアンケートを通じて、「何を良くしていきたいか」というと、やっぱり「実際手に取ってもらいたいものなのか」とか、はたまた「じゃあ、実際に購入するものなのか」とか、「もしかしたら、金額っていくらぐらいが妥当なんだろうか」とか、実際にみんなの手元にしっかりと残っていって、その後もしっかり活用されるかどうか、いわゆるマーケティングのところですね、そういう部分で、「何を聞くと一番良いのか」、「何を調査すると良いのか」というところをお伺いできればと思っております。

参加意欲を湧く景品については、もう我々の頭だと「サランラップが良いじゃない

か」みたいな話になったり、「油がやっぱり良いじゃないか」みたいな話になってしまうので、「そういう話ではなくて」というところの部分の観点から、ご意見を賜ればと思います。よろしくお願いします。

もうこれは完全に堅苦しくなく座談形式でいただければと思いますので。

事務局（浅井）

あまり時間がないですので。

事務局（片岡）

ですので、それでは大城さま、お願いします。

大城委員

ちょっと考えさせてください。

事務局（片岡）

そうしましたら、阿久津さま、いかがでしょうか。

阿久津委員

誰におすすめしたいか。

事務局（片岡）

「誰に」というのは、この本の（ターゲットのことでしょうか)。

阿久津委員

本を見て、見てというか、手に取って、じゃ、次に誰に託したいという（質問が良いかと考えています)。

事務局（片岡）

メインターゲットというと、どなたを想定していますか。

事務局（渡部）

20 代、30 代の親子世代ですね。

事務局（片岡）

「託したい」というのは。

阿久津委員

それを（アンケートで）聞きたいです。

事務局（片岡）

なるほど、そういうことですね。

阿久津委員

例えばお母さんとかだったら、子どもになのか、親になのか、2 人におすすめしたいかという。

事務局（片岡）

なるほど、「この本を誰におすすめしたいのか」という質問ですね。ありがとうございます。これって自由記述のイメージでしょうか、どちらかというと、選択記述のイメージでしょうか。

阿久津委員

選択肢があると答えやすいと思います。

事務局（片岡）

なるほど、誰におすすめしたいかの選択肢として、近くの家族とか、子どもとか、そういったイメージですよね。

阿久津委員

そうですね。ママ友なのか、学校の先生なのか。

事務局（片岡）

選択のカテゴリーの部分は、改めて考えていきたいです。確かに、誰に薦めたいかという（のを聞く必要がありますね）。

阿久津委員

そうですね。川崎市民だけじゃない、市外の人にも読んでほしいという声がどれぐらいあるのか。

事務局（片岡）

確かにそういうのですね。ありがとうございます。

お時間もあまりないので、それではどしどしいきましょう。

大城委員

今の発言に少し近いですけど。「誰と読みたいか」です。子どもと読みたいのを引き出したい感じはありますけど。おじいちゃん、おばあちゃんとお母さん、親とかと一緒に昔の話をしたりするとか、活用方法について知ることができればと。

事務局（片岡）

確かにそうです。

大城委員

活用したいと思ってもらえると良いかなというふうに思います。

事務局（片岡）

確かにこれがわかってくると、（書店の）どこの棚に、実際に置きにいくと、より有効的になるのかとか、広がりがあるのかというところも確かに見えてきますね。

大城委員

なにか後日買ってほしいという声がでてきたら、嬉しいです。

事務局（片岡）

確かに。ちなみに景品について、阿久津さまにも併せてお伺いしたいのですけど、どんなものがあったら（アンケートに）答えますか。

割とリアルなところでお子さんと一緒に行かれて忙しいという時に、わざわざガラポンしてアンケートに答えて、こんな景品だったら、すぐやっても良いかなみたいな（景品がありますか）。

阿久津委員

子どもが好きだったのは、すぐもらえるものじゃなくて、ちょっとゲーム性があるというか、スーパーボールすくいとか、1回、2回できるとかは、（子どもが）やりたいみたいな感じになる。

事務局（片岡）

なるほど。そうなると、最初、子どもがガラポンをやるのではなく、「アンケートが終わったら、ガラポンをひけるよ」というほうが意外とアンケート回答率が高くなるのですか。

事務局（浅井）

今はそういう流れです。先に「ガラポンができます」って言って見せて、次に投票してもらうことです。去年の CFS（Colors, Future, Summit！）のスタイルです。

阿久津委員

あと、駄菓子ぐらいの価格の小さいおもちゃとか。

反町委員

割と日常的にイベントでやっているものからいうと、1つはガラポンがあるから、あれなのですけど、場合によってはガラポンもあって、さらにガチャガチャ。とにかく、ガチャガチャは食い付きが（良いですね）。中に何が入っているかというより、ガチャガチャ自体を回したい世代の子どもたちは多いです。ガチャガチャを見えるとこに置いとけば、それだけで食い付きます。もちろん中により楽しい景品があれば、良いですけど。

あと、景品で言うと、今、安めのおもちゃという話があったのですけど、一応、縁日用の景品シリーズというのが色々あって、何か全部見えていて、厚紙にぶら下がっているタイプのもの、昔ながらのやつもあるのですけど。もう1つ「あつめるんです！」シリーズとか、Google で検索すれば、すぐ出るのですけど、紙箱の中に子ど

もが手を入れて、そうするとガチャガチャのカプセルが入っているので、それを自分で1つ取り出すと、おもちゃが入っているというものです。確か単価が1個あたりで5、60円ぐらいになる計算だったはずです。（単価は）大体ものによる。ものすごいシリーズがあって、可愛い女の子向けの可愛いお菓子もあれば、リアルな虫シリーズというのもあって、親御さんが必死で止めるのですよ。「これはやめなさい」って言いながら、でも子どもが絶対これが良いと言って、虫を引くのがまた面白いですけど。凄いいろいろなシリーズがあるので、凄い定番で流行っているので、おすすめです。以上です。

事務局（片岡）

良いですね。

ちなみに大城さまいかがでしょうか？また戻ってきてしまいますけど。

大城委員

なんか川崎市にまつわる何かがあると、良いかなと思います。

反町委員

本当はそうですね。

大城委員

歯医者などでも、（景品は）もらえちゃうのですね。100周年の時に消しゴムで「川」になるのって、あれはすごい大人気でしたね。

反町委員

ブロックみたいな消しゴム（編集注　「川崎市ブランドメッセージ消しゴム」のこと、市主催のイベントや市制100周年記念事業等で配布していました）のものとかあったじゃないですか。

自分で作れる川崎の立体的なロゴみたいなもの。この間のワークショップでもありましたよね。もしあれまだ在庫があるなら、すごく可愛いし（景品として良いかと思います）。

事務局（片岡）

シティプロモーション推進室に言っておきます。

大城委員

ウェブアンケートでは、川崎市内で使える金券。川崎市のお店で使えるもの。

事務局（片岡）

あのドラえもんの（じもと応援券）ですね。何かしら川崎ゆかりみたいなものがプラスオンできるとすごく良いですよね。

事務局（浅井）

区民祭なので、その区民祭で使える金券とか、良いかなと思います。

中村委員

私も良いですか。子どもが好きなのは、タダでもらえたら何でも嬉しいと思うのですけど。緑化フェアの時にあった缶バッジに自分が絵を描いたやつが缶バッチにしてくれるとか。あと、グッズにこの市史を作っていることを刷り込み、せっかく（区民祭に）行くなら、知ってもらうために、アンケートだけじゃなくて、持って帰ってもらうグッズにその要素があったほうが良いじゃないかなと思って。

例えば、うちわを用意して、そこに絵を線画で書いておいて、横で子どもたちに（色が）塗れるよっていう、後ろ側でお母さんたちがアンケートを書いています。子どもたちがワークショップをしている時にはずっと親が暇なので、その時にアンケートをするのが良いじゃないかなと思って。なぜ今「うちわ」と言ったかというと、区民祭なので、うちわはすごく役立つから。この前、高津区民祭に行った時、すごく熱くて、「うちわが欲しいな」って思ったのもありましたし。やっぱり緑化フェアの時、缶バッチがすごい。缶バッチばっかり増えて、うちは困っちゃうのですけど、子どもはもう大好きだから、缶バッチばっかりありますし、その缶バッチに自分の絵を描いて。

あとは、うちわに、せっかくここまで作っていただいたら、どれか（本の）1枚をチラ見せしたらダメなのかなと。印刷したもので「こういうものができます」みたいなのを、少しチラ見せにする。版権とかもあるかもしれないですけど、そこが大丈夫であれば、「実は本を作っていくのだけど、どうですか？」みたいな。

ここまできたら、どれか見せられるのではないかなって思います。その「めくって楽しむ」も1個見本の手作りで置いといて、「これってどうですか」、「えーすごい」とか（の返答が）もらえたら、なにかやる気が出ちゃいますよね。

事務局（片岡）

確かにそうです。

阿久津委員

それを漫画にしても面白いですね。

中村委員

これの作っているのを、漫画によって広げていく。そうすると子どもたちと、こんなものができるんだみたいな。認知を上げようとしたりして、参加していると思うので、参加型で「作れるとか」、「持って帰れる」とか。

そのためには、実はタイトルがそろそろ欲しいところなのですけど、タイトルが決まれば、それはそれで、いろんなことが結構できるので、タイトルとロゴがもしできるとしたら、今も素敵な二つ折りのチラシ（「ししる」）をいろんな区役所とかで拝見することはできているのですけど。あのような感じで、そろそろここの中（編集懇談会）だけじゃなくて、表に出していく時期かなと思います。

事務局（浅井）

二つ折りの冊子「ししる」の第2弾は9月に作るので。

中村委員

あの「ししる」がうちわになっても良いし。もし良いのなら「二ヶ領用水が、こんな（ページになっています)」みたいな。「できたら、どうでしょう？」みたいなものを持ってアンケートをやって、それこそシールとか貼ってもらうとか。「こんなの面白そう！」とか言ったら持って帰ってもらって。「楽しみだな、ワクワクが増えるよ」のようなものをなんでもあげるわけじゃなくて、ちょっと関係するものをあげるほうが、そろそろそういう時期なのかなと思いました。

事務局（片岡）

ありがとうございます。結構、映画とかのプロモーション手法と近いですよね。

多分ティザーが先にあって、それがうちわとか、そういったものの中に入ってきて、それを一緒にワークショップで仕上げるみたいなところで言うと、景品というよりは、全員に必ずもらえるみたいな。とりあえず、ガチャというか、ガラポンはやってもらうためのきっかけのところに収められればと思います。ここは色々アイデアを考えて、何が一番（良いのかを考えていきたいです)。

中村委員

うちわにも、川崎市のマークだけあって、未来の川崎を描いてもらって、「どんな川崎になってほしい」みたいな、子どもに好きな絵を描いてもらって、それだけで良い気がする。

しんゆり映画祭って、うちわをこうやって動かすと、絵が動いているみたいなのがあったりするので、昔の川崎と今の川崎が見える、「こんなふうに見えているんだ」みたいな。うちわは販促物としては高くないかなと思うので、厚紙に一つ穴が開いているタイプが安いかなと思うので、それに関するものとかが喜ばれそう（と思います)。

事務局（片岡）

良いですね。遊べるノベルティで本も遊べるよ、と教えてあげれば買いたくなると

思うので、そこは考えてください。

他にいかがでしょうか。意外とこの下のほうはいろいろな多くの意見が出てきているのですけど、上の「何を聞きたい」のが出てないので、いかがでしょうか。

中村委員

川崎市のどこが好き（という質問は？）。みんなが大好な「10 項目の中のナンバーワン」といったランキングをいっぱいやって。「おすすめの食べ物」とか、「テーマ」とかが多分きていると思うのですけど、本当に市民からアンケートを取って、ランキングを取って、目指せ 1,000 人の回答を。

反町委員

区民祭なら、もうちょっといける気がします。1,000 人以上は目指したいですよね、これだけ区民祭があるのなら。

事務局（浅井）

去年の 3,000 人は「CFS（Colors, Future, Summit！）」と「みんなの川崎祭」と「緑化フェア」の 4 日間で（回答してもらったのです）。

中村委員

今回は 6 回やるから、1 万人か。

事務局（浅井）

日数でいうと、7 日間あります。

嶋田委員

なんで幸区が入っていないのですか？

幸区民祭もあるのですけど、日にちがぶつかっているためですかね。

事務局（堀切）

「みんなの川崎祭」の方で、同じ地域性というところで大目に見ていただきたいです。

嶋田委員

まあね、一番人口少ないですし。

事務局（片岡）

他は特になければ、また思いついていただいたタイミングで、メールか何かでいただいたりできればと思いますので。上は我々の方でしっかり考えつつ、下の方もかなりギミックとして面白いものがありました。みんなに驚かせられるようなものを作っていたいと思います。結果、サランラップになるかもしれないです。よろしくお願いいたします。そうしましたら、最後、閉めていきたいと思います。

（次第－４）　総括／次回案内

事務局（堀切）

事務局の方から、前回ご推薦いただきました「わた史」の人物の推薦の件と、次回の議題について説明させていただきたいと思います。

次回の議題ということで、本日お配りしました次第ですけれども、今回の「本のデザインの考え方」を追加したのですが、更に今回も赤字で「書名の考え方について」を追加させていただきました。

次回懇談会は 9 月を予定しているのですけれども、書名について今回のアンケートで 10 月、11 月のイベント会場で投票していただくことのアイデアを現在、市公式サイトで募集していているところです。

こちらは 7 月 20 日まで募集をしているのですが、以前メールで募集に関して「ご協力をお願いできないか」ということを打診させていただき、ご協力をいただきましてありがとうございます。

現在は 4 桁には届かないのですけれども、比較的善戦したのではないかというところで、420 件を超えるアイデアをいただいています。

今、募集をしているところ、それが 7 月 20 日に締め切りを迎えましたら、今後タイトル案を取りまとめていきたいと考えていますので、次回はそのタイトル案をお示しして、ご意見をいただきたいと考えているのですけれども。

今回、その本のデザインの考え方ということで、コンテンツごとの色ですとか、テイストですとか、文字の大きさですとか、写真の入れ方とかというところを、ご意見をいただいたのですが、書名というものは非常に本の全体感や、方向性を表すものになっております。

また、表紙のデザインにも大きく影響が出てくるものですので、今後の完成形を見据えながら、「どういったものの方向性で、タイトルをまとめていくか」というところをご議論いただきたいです。

ただ、420 件もありますので、それを全てお示ししてご議論いただくというより、方向性をお示しした中でのご意見をいただくようなかたちでご協力いただきたいと考えております。

もう 1 点が、前回ご推薦いただいた「川崎市のわた史」の人物の選定状況です。前回 39 名のご推薦をいただいたところで、大変ありがたくと思っております。

現在、川崎市の内部で選定の議論を進めているところでして、「わた史」のタイト

ルについて、先ほど実は（案）というようなかたちにしていたのですけれども、以前「川崎市のわた史」というようなタイトルを入れていたのですが、議論を進めていく中で、今回、本で取り上げられる方はすごく名誉なことなのではないかと。今回のデザインを見ても、「テーマ史」がやはり大きいコンテンツなのですけれども、「人物史」もかなり内容として、こういうデザインですので、人選については今議論をしているのですが、方向性と言いますか、その人物像というものは、以前ご推薦をいただいた時の考え方とずれていないのですけれども、こちらで語っていただく方に対するリスペクトを込めたコンテンツ名の検討を現在進めておりまして、差し替えをさせていただきたいというところが１点ございます。

もう１つは、39 名推薦いただいているのですけれど、地域によってだいぶ大小が出ております。幸区ですとか、宮前区ですとか、麻生区ですとか、そのほか多摩区ですとか。それ以外の地域と比べると、大小が出てきているというところもございます。

前回発表いただく前に鈴木（ひ）委員から、「どういうコンセプトなのか」という質問があったと思うのですけど、それは当初と変わっておらず、人物が語る歴史ですとか、伝統的なものから地域の歴史が見えてくるようなかたちの取り上げ方にしたいと考えています。

以前にご推薦をいただいた方以外で、実は「こういう人もいたのですよ」という方がもしいらっしゃれば、ぜひメールでいただけないかというお願いです。

追加で、もし「こういう人を実は抱えていたのですが、当日時間の関係もあって、お出しできなかった人物がいたのです。」という委員がいらっしゃれば、いただきたいです。

なるべく多い人数の中で、選定をさせていただきたいというふうに考えております。追加でいただいた方も含め、もし少し足りない場合には、事務局のほうでも色々ツテを辿り、お願いさせていただいたりするとか、探し出して、追加をさせていただき、選定をしていこうと思っているところでございます。

本日出席されていない委員の皆さまにもお知らせしたいと思っていますので、本日以降に、メールでご案内をさせていただきますので、思いつく方がいらっしゃればお寄せいただき、ぜひ追加できればということで、お願いいたします。

鈴木（ひ）委員

区ごとに１人ずつとか、そういう考え方ですか。

事務局（堀切）

そうでなくても結構です。地域を意識していただけると当然ありがたいのですけれ

ども、いらっしゃればというところで考えています。

ふさわしい人物はいっぱいいるようで、考えていくと、なかなか限られてくるところもあると思いますので。「この人は」という観点で出していただければ結構です。あまりその地域性ですとか、そういうものも加味していただけると、大変ありがたいですけども、意識しないで出していただいて結構ですので、ぜひお出しいただけると大変助かります。

落合委員

どういうコンセプトですか。

事務局（堀切）

元々、その人物を掘り下げて、人物の背景からわかる歴史ですとか、文化ですとか、伝統芸能とか、そういう観点も実は入れられるとよろしいかなというふうに考えているところです。その人物から分かる川崎の歴史ですとか、文化というものがこの人物史のコンセプトとなっているところですので。

事務局からは以上でございます。

事務局（浅井）

それでは、最後ですけれども、次回は９月の上旬の開催を予定しております。

また改めて日程調整お伺いいたしますので、お忙しい中ですがご参加よろしくお願いいたします。ありがとうございます。

（全体一同）

ありがとうございました。

以上